關西大學々報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十八年二月十日印刷
昭和十八年二月十五日發行

編輯兼發行人　酒屋敷民雄
發行人　大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　西大(72)谷口印刷所
大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報局
會員登錄番號二〇六〇〇四

第二百六號要目

泰國人の社會生活……福島四郎（一）
紹介と書評……靜田均（五）
學內報……（六）
校友欄……（七）
千里山圖書館南方關係圖書……（一〇）

泰國人の社會生活

教授　福島四郎

一　大東亞戰の壓倒的勝利に伴つて南方共榮圈の建設が刻下の急務となり、この目的達成のためにその圏域における諸民族國家の實情を研究することが絶對不可缺であることは今更多言を要しない。從つてその政治、軍事、外交はいふに及ばず社會、經濟、文化に至るまで一つとして無關心たり得ないことも亦勿論であるが、これ等の問題も結局は總てその固有の民族性を基根とするそれぞれの國家社會觀に起源するものであることに想到するならば、この民族性の把握乃至社會觀の認識こそ何よりもまして緊要な先決問題であることは自ら明白であるといはねばならぬ。併しながら民族の性格を理解し社會の眞相を究明するといふことは誠に以つて至難なわざであり、單純な表面的の觀察や機械的な技巧によつて到底達成し得るものではない。親しくその社會その民族に接觸し直接その傳統乃至習俗を見聞した上、この結果を高き叡智と鋭き理性とを以つて綜合批判するところがなければならぬ。

泰國は南方共榮圏域に君臨する光輝ある新興國家であり、今次聖戰の目的完遂のために雄々しくも蹶起した英雄的盟邦でもある。彼我相互の間にその認識を深めることは今後益々必要な緊密の提携を促進し、親善の强化、共存の結實を確保する上に極めて有効且つ必須の大事である。今左に私が泰通として著名な二三の外國人の手になる見聞記を通じて、その社會實情の一片を紹介する所以のものも亦實に多少なりともその目的に貢獻せしめんがために外ならない。

二　泰國人の性格の一面を端的にいひ表はす言葉は「スヌーク」"Snuk"である。これは戯談好きとか逸樂を愛すとかいふほどの意味を持つ。彼等は性來笑ひを離さず愉悅の生活を愛し、自分達に畏怖を感ぜしめる者には敬意を拂つて遠ざかり、快味を與へる者には親愛の情を吐露して接近する。宗教觀もただ單に教主の崇高なるを禮拜するといふに止まらず、それが生活に慰安を與へる必要物であるといふ思想に基礎をおいてゐる。寺院は彼等の社會の中心をなしこれをめぐつて宗教的儀式や散歩、演劇その他の大衆娯樂が常時そこで行はれるといつた狀態である。全般的にみて教育程度は甚だ低く文化も餘り振はないのであるが、それにも拘らず自由と獨立の

精神は旺盛で明朗と活脱を尊び、しかも宗教によつて自然に備へられた寛容さと大宇宙の神秘力に對する恐威に基づく謙讓さとを具有する。彼等の大多數を占めるものは土と共に生き土と共に死する農民であつて、過去幾世紀の間彼等の上に加へられた壓制と暴虐とにもめげることなく、悠然として自己の地位を維持し默々としてその生活を繼續し來つたといふことは實に驚くべき偉大な特性といはねばならぬ。

その性格の他の一面は「フンク」"Phu'ng" といふ言葉でいひ表はされる。これは何物かに依存するとか他力本願とかいふ意味に相當する。この依存の觀念は恰も中世の封建國家において人民が自己の保全をその領主に賴り、奉仕助力を以つてこれに報いたのに類似してゐる。前述の如く彼等は學つて自由獨立の精神を信奉するにも拘らず、自主自律の觀念は極めて乏しく、事實一九三七年前後においてすら尙封建的保護者の袖に隱れて生活せんと欲する者が相當存在し、懶惰と無氣力の風が街々に充ち溢れてゐた。その原因が何處にあるかについては未だ確たる斷定を下し得るまでには到つてゐないが、この國天賦の極樂的氣候と食糧の豐富に基く生活の安易とが與つて力あるものであることは否み難い事實であらう。併しながら今やバンコッグを始めその他の大都市においては眼まぐるしい雜沓を呈するほどの繁華狀態と逞ましい活動力の充滿した近代精神とを現出し、エネルギーの極大的發散が到る所で目擊せられ、この喰ふか喰はれるかの現實的鬪爭の中に彼等の懶惰性もやがては自然消滅すべき運命に見舞はれてゐる。また彼等の進取的氣性の妨害となつてゐる最大の原因は、泰國人一般の通有性たる內氣で自信のないことである。專制君主政體の下にあつた國民は何れも各種の階級に分たれ、相互に上官を畏敬し下級を壓迫し、命令は絕對であり服從は嚴守せられるべきものとせられた。この結果は遂に現代泰國人の獨創的且つ自主的思想の缺乏となつて現はれたのである。併しながらこの點も幸ひ高度の敎育を受けた都會人士の間には漸次解消矯正せられつつあり、文化の普及に伴つて將來は地方農民の間にも次第に近代的自主の氣根が强く植付けられて行くことであらう。

更に泰國人は極めて禮儀正しい民族であり友誼的な國民でもある禮儀の尊重は社會必須の淳風であり、友誼に厚いことは人間最高の美俗であると心得てゐる。併しながら生存競爭の激甚な大都會では既に技巧化された內容の空虛な儀禮方法が行はれ、その表現の仕方にも隨分好ましからぬものさへ見受けられるに至つてゐるといふ。かくて極めて打算的利己的思潮の浸潤するにつれて泰國人の持つ美しい友情も漸次失はれ、他人の立身出世を喜ばぬ個人主義的倫理が次第に强化せられる傾向にある。こゝでは社會の進化が齎らす弊害の一面が窺がわれる。

三　泰國においては夫ある婦人が他の男子と不義の關係を結ぶことは佛敎の上で嚴禁せられてゐるにも拘らず、一夫多妻の制度を積極的に禁止する法律は未だ制定せられてゐない。併しながら最近の一般的傾向としては一夫一婦の新婚姻制の確立が努力されつゝある。これは一つには一夫多妻制が比較的富裕な者にのみ可能であるといふ理由と、新婚姻法によつて一人の妻のみが正妻として入籍しその子供だけが正式に嫡出子として認められ家督相續權を取得し得るに止まり、その他の妻妾や庶出子は特別の遺志による場合のほかは法律上の資格を有し得ないといふ理由とに基因する。ただし泰國には私生子の如きものは存在しない。蓋し或る男子が未婚の女子と關係するときは彼女は必ずその男子の保護を受けることとなつてゐ

るからである。この國における一般青年達の理想的幸福とは多數の妻妾を養つて出來るだけ多く戀愛をすることであつて、或る程度の性的自由を享樂することは若き青年層に當然許された特權の如くに考へてゐる。それにも拘らず離婚數は統計的には極めて少なく、世界中で最下級の離婚率を持つ國家としての榮譽を荷つてゐるわけであるが、實はこれも夫が現在の妻に飽いたならば直ちに別の女子を家庭内に同居せしめるが如き不倫な行爲を敢て許容してゐることや、實質的には離婚でありながら形式上は離婚と看做されないところの所謂別居制度が代用せられてゐることによるものであつて、必ずしも賞讃に値するものでないのみならずむしろ却つて憂慮すべき事態ともいふべきものである。ワヂラウヅド王は一夫一婦制を熱心に奬勵し、結婚の儀式を一層嚴肅且つ重大な人生の典儀としてその登錄に關する規定を起草せしめたのであつたが、この草案は古來の舊慣と國教とに適合しないとの理由の下に承認せられるところとならなかつた。爾後數次の曲折を經て一九三五年の三月人民議會によつて現行民商法典の親族編が可決せられ、同年十月一日を期して婚姻は全部法律上登錄を必要とするに至つた。新婚姻法は夫を以つて一家の首長と認めその安寧を顧慮せしめるのであるが、妻に對する支配權については何等規定するところなく、從來は離婚成立の場合において全財産の三分の二を夫に與へその殘部を妻に得せしめてゐたが、本法はこれを夫婦平等に折半することゝし、また夫が結婚の誓約を破り妻をして爾後婚姻生活を繼續することを不能ならしめた場合は、妻は夫と離婚し得るものとなす等、その全文を新聞紙上に掲載し國民一般に對して懇切丁寧に解說するところがあつた。敎養ある人々は直ぐにこの趣旨を諒解しその規定に準據したのであるが、折角の新法も國民の大部分には單なる一卷の書物たるに過ぎなかつた。婚姻屆を怠つても別段投獄や罰金の制裁を課せられないことを知るや、それは忽ち彼等にとつては全く無關係なものになり終つてしまひ、婚姻の大半は無登錄のまゝに放置せられる始末であつた。併しながら一般智識の向上と違法運動の努力とが相俟つて、漸次その趣旨が民衆にも理解せられこれに遵ふ者の數が日增に擴大しつゝあるに至つた。

泰國における女子は家庭の財政上極めて重要な役割を果たすものであるにも拘らず、實際の家庭生活や社會生活上は甚だしく低い地位におかれてゐることは看過し難い事實であつて、既に一有識婦人の如きはこれに對して、泰國の女子は社會生活を除いては總て男子と對等平等であり、特に法律上は女子のためにも廣汎な門戸が解放されてゐるにも拘らず、事實社會的には悲しいことに全くこれと趣を異にしてゐると指摘して、痛烈な非難の一矢を放つてゐる。かくて女子の社會的發展は一面においては良い方向に向つて躍進せしめられたのであるが、他面またそれは惡い方向に向つても伸延することを免れ得なかつた。女子も賭博や虛僞や飲酒等の惡癖に感染しダンスやバーに入りびたることを覺えた上に、文化の發達に伴つて女子もこの程度の享樂をなすのは當然であるといふような大それた議論を吐く婦人さへも現はれて來た。併しながらこれ等は全體からすれば極く少數の例外的存在であつて、大部分の女子については確かに健全な向上がみられた。

四　その他家庭生活一般の改善に關する問題も屢々新聞紙上で論議せられてをり、特に家庭における女子の地位と夫の成功の蔭に隱れた妻の內助の功の偉大さとについてはその重要性が强調されてゐる。今やその生活樣式も漸やく近代的形態に移行せんとする過渡期

に立ち、現在の農民の家屋は何れも地面から約五呎位高く建てられてゐるが、これは氾濫季の水害を避けると共に床下には家畜を飼育し、夜ともなれば梯を引き上げて外敵の侵入を防禦するといふ一石三鳥の建築方法によるものである。グラ〳〵した危つかしい竹梯子を登ると洒落なヴェランダがあつて、こゝから五吋程高い所に家族の人數に應じて二間乃至三間位の部屋が設けられてゐる。建築は大抵木造か竹造かであつて、家毎に機織臺が備へられてゐて主婦によつて家族の衣服が調製せられる。農民は一日二回乃至三回食事を採る。家族は輪になつてヴェランダに坐り飯櫃を側において眞中にカレー、魚肉、野菜等を入れた小皿を一杯並べ、各自がこれを少量づゝ取り分けて巧みに指を用ひてこれを喰ふ。米の植付期や刈入時には家族總出で協力し、水田の中で嬉々として終日働き廻る。かくて多忙な幾日かが過ぎると家の後の倉庫は收穫でギツシリ詰り、一ヶ年間の重要な食糧として貯藏せられる。農民の服裝は極めて簡粗で多くは殆んど上衣を纏はない。これに對して都會に住むサラリーマンの家庭生活は農民のそれとは大分その趣を異にする。家屋は二階建の板壁に瓦屋根、セメントの床の小さな家であつて、應接間としてヴェランダ又は大廣間が一つ用意せられ、片隅に臺をおきこれに毛布と枕が添へられ親友などは一諸にこの上に横たはつて歡談する。泰國人は一般に多年の習慣上大抵マツトの上へ坐るかさもなければ何時間でも平氣でしやがんでゐる。サラリーマンは皆上衣を着け多くはキチンとした服裝に改められ、この國特有の傳統的服裝樣式は最早都會からは漸次姿を消しつゝある。階級的差別の思想も既に近代の泰國には受け入れ難いものと化し、士民平等、機會均等が全國民の等しい感情であり切實の欲求ともなつてゐる。かくて新しい世代への推移と共に國民全體の均等を表はすために稱號が廢止せられ、社會の傾向は急速にデモクラテイツクの方向へ轉行し、その結果の是非は別としてともかくも今日みるが如き市民社會の形相を整へるに至つた。從來の稱號は多年官職に奉じた者の功勞に報ゆるために與へられたもので、彼等の位階勳功は稱號によつて代表せられてゐた。從つて稱號の引力は國家有爲の青年をして大實業者となるよりは收入は尠なくとも官吏への道を選ばしめるに充分であつたが、稱號は廢止せられた現在官途の魅力も頓に減殺せられ事態は全く逆轉してゐる。こゝでも亦大なる時代の動きが強く感受せられる。

以上の如き社會實情にある泰國において、如何なる法制が實施せられ如何に秩序づけらるべきかは今後に殘された興味深くも亦容易ならざる問題であるといはねばならぬ。

文部省推薦圖書（拔萃）

○少年教護論　菊池俊諦著　B6 三九頁 二・八〇　成美堂書店
○古流球　伊波普猷著　A5 四六六頁 四・八〇　青滋社
○工場安全　上野義雄著　A5 二三〇頁 二・五〇　東洋書館
○日本工業史　南種康博著　B6 四一九頁 三・〇〇　地人書館
○鐵の歷史　ヨハンゼン著 三谷耕作譯　B5 四〇五頁 10・〇〇　慶應書房
○世界史の哲學　高山岩男著　A5 三五〇頁 四・五〇　岩波書店
○團體觀念の史的研究　河野省三著　A5 三二五頁 三・〇〇　日本電報通信社
○元田永孚（日本教育先哲叢書）　海後宗臣著　B6 三二一頁 一・六〇　文教書院
○安南史（東研叢書）　揚廣咸著　A5 三六八頁 二・〇〇　東亞研究所
○民族耐乏　高田保馬著　B6 三三五頁 二・七〇　甲鳥書林
○濠洲聯邦　富田豪一著　B6 三七三頁 二・七〇　紘文社
○佛教學入門　木村泰賢著　B6 三二一頁 二・五〇　大東出版社
○歐米に於ける支那研究　石田幹之助著　A5 四八八頁 五・五〇　創元社
○米國外交上の諸主義　立作太郎著　A5 三七八頁 三・八〇　日本評論社
○現代印度の諸問題　脇山康之助著　A5 三〇〇頁 一・八〇　映畫出版社

紹介と書評

『中小工業統制組織』『現代工業政策論』

―磯部教授の新著を讀む―

講師　靜田　均

一

磯部教授は最近二つの勞作を世に問はれた。『中小工業統制組織』と『現代工業政策論』とが即ちそれである。

『中小工業統制組織』は日本學術振興會第二十三小委員會の報告書の形式になつてゐる。これは赤松、田杉、藤井、小出、藤田等の諸氏との共同研究であり、各自の執筆された論文を輯錄したものであるから、嚴密にいふと、磯部教授の著書といひきつては誤解を招くかも知れない。しかし教授はこの論文集の編纂者であるばかりでなく、内容の尠くとも半分を擔當されてゐるのだから、その意味では殆んど同氏の著述に近いといつてよし、普通の場合、編纂者が單なる名儀だけのものであるのとはいさゝか趣を異にするのである。

學術振興會はこれまで「時局と中小工業」と題して、すでに四つの論文集を世に送つたが、いままた新たに一つの美事なシムポジウムを加へたことは洵に慶賀に堪へない。いふまでもなく、わが國の產業構式において中小工業のしめる比重は極めて大であつて、第一次歐洲大戰後一般の關心を萬めてきた。磯部教授はさきに『工業組合論』を公にして、中小工業者の自主的統制組織に關する克明な研究を發表され、それがこの方面の最もオリヂナルな業蹟として重きをなしたことは、人のよく知るところである。

支那事變以後、中小工業問題は特に急迫をつげ、日增しに深刻な相貌を呈するに至つた。學術振興會が「時局と中小工業」をその研究題目として取上げたことは偶然でないが、同時に篤學の士の協力を仰いだことは、極めて適切な措置であつたといはねばならない。

さて問題の『中小工業統制組織』は、二つの部分より成り立つてゐる。第一篇はいはば概論的な研究であり、中小工業における統制組織の特質（磯部）、問屋制工業における統制組織（赤松）、農村產業組合運動と中小商業の交涉（磯部）、中小工業と金融問題（田杉）等を取扱つたものであるが、その何れもが支那事變以後最近に至るまでの變遷の推移に重點を置いて考察した點に共通の特色がある。

第一篇が一般論であるのに對して、第二篇は業種別の研究であり、それだけ特殊問題の專門的研究たる色彩が强い。ここでは石灰、機械、護謨、陶磁器、綿織物、毛織物、莫大小等の諸工業が選ばれて居り、執筆者は磯部、藤井、小出、藤田の諸氏である。一見して明かなやうにこれらの諸部門はわが國中小工業を代表する典型的な業種であるから、これに關する立ち入つた個別的研究は刻下の實狀を把握する上に貴重な貢獻をなすものであり、卓れた特殊研究として江湖に推奬することができる。

二

前述の如く、『中小工業統制組織』は多數者の共同執筆にかゝるものであるが、『現代工業政策論』はむろん磯部教授單獨の執筆である。われわれはこゝで教授の舊著『工業政策要論』を想ひ起さざるをえない。あの本の出たのはたしか昭和九年であつたから、もう十年近くになる勘定だ。十年一昔とはよくいふけれども、最近十年間における日本の、いな世界の變り方はまた格別である。それは日進月歩といつたやうな月並みの形容でいひ現はすには、あまりに急激であり、かつ深刻でありすぎる。といふのは、つまり經濟生活のあらゆる面に對し、國家的統制が年一年加速度的に擴大され、强化されたといふ意味なのだが、その中でもなかんづく工業が中樞的な部分をしめてゐる。

一

『工業政策要論』は公刊の當時、簡潔にして判りのよい參考書として好評を博したのであるが、近年は事實上絕版の形であつたらしい。おそらく戰時下における工業經濟のすさまじい變貌が、著者をして增刷を躊躇せしめた主要の原因なのであらうが、それにつけても手頃な參考書が欲しいといふことは、讀書界の痛切な要望であつた。いまやそれが『現代工業政策論』の刊行によつて滿たされたわけである。

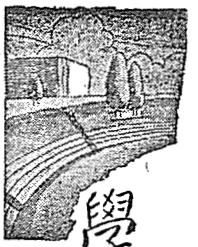
著者は序文の中で『單なる教科書以上の書』であり、年來の研究の集大成であることを率直に語つて居られる。不幸にして内容に即した紹介を試みるだけの餘白をもたないが、全卷を通じて著者の個性は隨處にこれを想見することができる。特に最近における戰時下の變遷まで取入れてあることは、本書の内容を文字通りアップ・ツー・デートたらしめるものであつて、近來の好著といふを憚らない。

ただ思ひつきを一言添へることを許されるならば、中間に挿まれた第五章以下政策に關する三章を最後に廻はした方が讀者に對してより親切な態度ではなかつたであらうか。なほ舊著の冒頭にあつた原理的な部分は、新著では削除されてゐる。しかし、これは別に『經濟政策概論』刊行の用意があるためだといふ。われわれは今後とも著者の多產的な活躍に大きな期待をかけなければならぬ。

中小工業統制組織、A5版、四九〇頁
定價四・五〇　有斐閣

現代工業政策論、A5版、四四六頁定
價四・八〇　有斐閣。

（一八・一・二〇）



學内報

專門部國漢科 漢文檢定認可

專門部第二部國語漢文專攻科卒業生に對し中等教員漢文科の無試驗檢定申請中のところ、一月十二日付を以て昭和十七年九月以後の卒業者に對し右取扱ひをなすの認可があつた。

國語漢文專攻科はさきに國語について認可あり、ここに同科は國語、漢文兩科目の中等教員無試驗檢定を受くることとなつた。

寄附行爲改正委員會

昨年三月十九日協議員會にて選任された財團法人關西大學寄附行爲一部改正の調査委員會は一月十四日（木）午後三時より北濱風月堂に開催した。

配屬將校 壹岐大佐急逝

專門部第一部配屬將校として戰時下の學校教練に專念し生徒の錬成に挺身されてゐた壹岐滿志大佐は一月廿六日午前五時十分腦溢血の爲め急逝された。同廿八日西成區南海通二丁目の自宅に於ける密葬には矢口專務理事、正井專門部長、和田專門部主事外教職員、學生生徒參列敬弔の意を表した。

尙遺骸は六日大阪驛發、九日鄕里鹿兒島加治木反田において本葬を執行される

報國團行事

耐寒訓練

▽學部—一月廿五日—卅日まで六日間午前七時より九時迄體操、劍道、銃劍道射擊に分れて實施、卅日には茨木方面まで十五キロの剛健行軍を行つた。

▽豫科—一月廿一日より二月四日まで午前七時半より八時廿分まで柔道、劍道銃劍道、射擊、弓道の五班に分れて訓練を行ひ、廿三日には能勢妙見方面二十キロの剛健旅行を、二月四日には茨木奥山に山野横斷十二キロの耐寒訓練を實施した。

▽專門部一部—一月廿五日—卅日まで六日間午前七時五十分より體操、銃劍道驅歩を行ひ、卅日には阿部野橋より住吉神社、護國神社、仁德御陵、濱寺海岸に至る廿四キロを跋渉した。

▽專門部二部—一月廿四日大鐵長野觀心寺方面の山野を跋渉した、參加者約六〇〇名。

生徒募集要項

大學豫科（修業年限二年）

▽募集人員　第一學年約三二〇名

▽入學資格　中學四年修了又は之と同等以上の資格を有する者

▽出願期日　二月一日より三月十日まで

▽出願手續　入學願書、卒業又は修了證明、手札形寫眞四枚、檢定料拾圓

實業學校出身に限り學校長推薦書

▽入學試驗

第一次考査　三月十八日（國史、國語、英語）

三月廿二日第二次考査を受くべきものを發表

第二次考査　三月廿三日（漢文、人物考査、體格檢査）

▽合格發表　三月廿七日午前九時

專門部第一部（晝間）（修業年限三年）

▽募集學科　法律學科　經濟學科　高等商業學科　各一學年

▽入學資格　中等學校卒業者又は之と同等以上の學力資格を有する者

▽出願期日　二月一日より三月一日

▽出願手續　入學願書、入學資格證明書（卒業證明書、最終學年成績證明書、又は專檢合格證明書）戸籍抄本、手札形寫眞一枚、檢定料拾圓

昭和十七年十二月實業學校卒業者は學校長の推薦書

▽入學試驗　三月十二日及十三日

國語、英語、人物考査、體格檢査

▽合格發表　三月二十六日午後一時

專門部第二部（夜間）（修業年限三年）

▽募集學科　法律學科　經濟學科　商業學科　國語漢文專攻科　英語專攻科　各一學年

▽入學資格　中等學校卒業者又は之と同等以上の學力資格を有する者

▽出願期日　二月一日より二月廿七日

▽出願手續　入學願書、入學資格證明書（卒業證明、最終學年成績證明、又は專檢合格證明）

▽試驗期日

法律學科　國語漢文專攻科、英語專攻科　三月六日

經濟學科　商業學科　三月七日

▽試驗科目　國語、英文和譯、外に國語漢文專攻科は漢文、英語專攻科は和文英譯を課す

▽合格發表　三月十八日午後一時

がくほう抄

▽大日本學徒海洋班大阪支部發會—二月六日阪大講堂に發會式擧行神戸學長、海洋班長堀教授出席。

▽金子講師長男　講師金子又兵衛氏長男二月六日逝去。

校友欄

校友會評議員決定

去る十一月廿九日昭和十七年度校友總會に於て會長一任となつてゐた評議員は十二月廿八日付を以て左記の諸氏に決定した。（五十音順）

安達彌五郎　安藤　光　阿久根幸吉
阿部　甚吉　青野　昌平　淺香要太郎
淺沼　淳　朝顔　公嚴　芦　傳一
天宅　俊治　天野　平一　荒木　典夫
井上　軒　井上專一郎　井上　登圓
伊東　大平　生島　藤藏　池田幸太郎
石井　庄逸　石原　孫市　石山豊太郎
板野　友造　市川　信　今岡　琢磨
岩崎　卯一　岩本　公夫　宇佐美正祐
上田　清　植田　完治　植田　重正
江里口正行　尾崎　暢男　織田佐代治
大川　光三　大北　朔郎　大小島眞二
大崎萬太郎　大島　武夫　大月　伸
逢阪　勝見　岡田　清作　岡田　雅一
岡野　武夫　岡野　廉平　岡本　理一
沖　鶴忠　遠部逸太郎　加藤　清
加藤金次郎　加藤　昌秀　樫本　信雄
梶川　義臣　柏元　孝治　片岡甚太郎
桂　忠雄　門上　敏夫　金子金次郎
鎌田　嘉之　神屋敷民藏　神宅賀壽惠
川上　敬逸　河村　宜介　寒川　喜一
木下清一郎　木藤　安之　木村　禎橘
菊池　勳　岸村德太郎　岸本　芳夫
北原　元茂　北村　源平　國歳　胤臣
熊谷　俊男　小林儀三郎　小林　絹治
小林　壽夫　小堀　欣二　後藤德太郎
甲川　嚴　佐藤　丈夫　佐野登喜雄
佐伯　三郎　坂本　龍夫　作間　耕逸
里見　復二　志野覺治郎　篠原　悅三
白川　朋吉　白砂　直樹　神保　敏男
鈴木　武夫　角田好太郎　關　豊馬
田中　英一　田中　藤作　高垣　善一
高梨　乙松　高橋　辰三　高橋　盛孝
武田藏之助　武田　宣英　巽　鐵太郎
谷岡　登　谷口　宗一　谷口　義正
谷田俊二郎　平　島　廣　闘師　親德
蔦谷　巖　土橋　成多　壷田　倫夫
寺田貞一郎　戸根　泰雄　富田金三郎
富田　貞男　鳥羽源四郎　内藤　滋治
内藤　正剛　中石　清一　中川庸太郎
中谷　敬壽　中務　平吉　中西　與七
中村　忠夫　中村　德藏　中村　敏雄
中村良之助　中本　勇　中山　幸市
永井　芳一　長柄　金吾　長尾　梅吉
長澤　健一　浪江　源治　丹羽　英夫
西本　寛一　西山幸二郎　錦見　一夫
野崎勇次郎　野田　博　野原　保
橋本　忠彦　八島　治一　林　由太郎
原田鹿太郎　春原源太郎　番匠　邦夫
樋口哲四郎　平井　三郎　廣瀬　捨三
廣田　憲信　深川　重義　福岡　彰郎
福本　一　古川　武　堀　正人
堀畑　軒一　堀本　周三　前田信之助
前田　金吾　前田　常好　牧　信清
増田房治郎　松原　藤由　松廣　壽衛
松本茂三郎　松本　靜史　三枝樹正道
三雲佳三郎　三島　律夫　三谷　友吉
三宅　萬吉　三宅　通夫　三好　萬次
南　清　米良貫一郎　森　明光
森　福太郎　森川　太郎　森田　仁一
森家　圭城　矢口　家治　安井　章吾
安川勝太郎　安川　彦夫　安川安太郎
安田清治郎　柳瀬　繁助　山口　辰雄
山崎　敬義　山本　順應　四辻　詮
吉川芳三郎　吉木　留喜　吉田　音松
吉田　一枝　吉田　奎文　吉村　種藏
和田　豊二　渡邊　明夫

會則第十二條による評議員

荒賀勝平（京都）、池田重吉（福岡）、磯野充賀（富山）、梅田鶴吉（德島）、江口透（南京）、大野政一（海拉爾）、岡内靜一（高知）、岡本至德（朝鮮）、岡本勳治（關門）、片山元藏（明石）、神崎傳次郎（岡山）、北浦圭太郎（奈良）、木村佐太郎（石川）、植野泰夫（堺）、桑原義隆（鹿兒島）、雜古貞雄（西宮）、白川千代治（香川）、高濱直一（關東州）、竹井小野右衛門（芦屋）、辻野新一（岸和田）、辻野丈治（上海）、内藤哲應（福井）、長埜友市（愛媛）、中場爾太郎（備後）、中村八十一（臺灣）、中田克己知（北海道）、野田文一郎（兵庫）、野田保規（廣島）、半田誠治（齊々哈爾）、堀田秀治（姫路）、増谷憲信（奉天）、松尾高一（尼崎）、松澤卓規（東京）、三原隆輔（新京）、宗本利市（愛知）、森原彌三郎（青島）。

評議員會開催

昭和十八年度第一回評議員會は一月廿三日（土）午後五時半より天六學舍會議室に開催された。當日の議案は會則第十三條による常議員の選出と本年度事業其の他であつたが、常議員選出は會長指名となり、本年度事業について岩崎常任幹事より評議員の意見を求め、又松本茂三郎氏よりは去る十一月廿九日校友總會にて委託されたる母校發展擴充策審議委員は人選の上會長迄提出する旨報告があつた。次いで遠く石川支部より出席された中西與七氏初め多數評議員の發言ありてこの非常時局に於ける大學の施策、其の他理工科設置、專門部校舍の移轉等の諸問題につき熱心な意見の開陳あり、神戸學長より、興亞文庫の設置、學科目の整備、報國隊の活動等につき説明し、尚目下研究中なる諸案に觸れ、評議員よりはこの際理工科設置その他懸案は早急に斷行を前提として研究されん事を熱望して眞劍なる討議の裡に八時半終了した。

出席者　神戸會長、阿部甚吉、青野昌平、井上軒、井上專一郎、市川信、岩崎卯一、岩本公夫、上田清、尾崎暢男、大崎萬太郎、加藤昌秀、樫本信雄、柏元孝治、鎌田嘉之、神屋敷民藏、菊池勳、小堀欣二、佐伯三郎、坂本龍夫、志野覺治郎、篠原悅藏、神保敏男、角田好太郎、關豊馬、竹井小野右衛門、巽鐵太郎、谷岡登、谷口義正、壷田倫夫、戸根泰雄、富田貞男、中川庸太郎、中谷敬壽、中西與七、中村忠夫、長柄金吾、野崎勇二郎、春原源太郎、廣田憲信、深川重義、牧信清、増田房治郎、松本

茂三郎、松本靜史、三島律夫、三宅通夫、南清、森福太郎、森川太郎、森塚圭城、安田清次郎、山口辰雄、山崎敬義、山本順應、吉田奎文

○常議員決定　一月廿三日評議員會にて會長一任の人選は左の通り發表された。（五十音順）

井上專一郎　石井　庄逸　岩崎　卯一
宇佐美正祐　植田　完治　大島　武夫
岡田　清作　加藤金次郎　加藤　昌秀
樫本　信雄　桂　忠雄　神屋敷民藏
河村　宜介　寒川　喜一　木下清一郎
楠野　泰夫　小堀　欣二　里見　復二
志野覺治郎　白川　朋吉　角田好太郎
關　豊馬　高梨　乙松　武田藏之助
巽　鐵太郎　谷岡　登　谷口　義正
鳥羽源四郎　内藤　正剛　中川庸太郎
中谷　敬壽　中村　忠夫　長柄　金吾
浪江　源治　八島　治一　原田鹿太郎
春原源太郎　樋口哲四郎　堀畑　旰一
松原　藤由　松本茂三郎　松本　靜史
三島　律夫　森川　太郎　矢口　家治
山口　辰雄　四辻　詮　吉田　音松
吉田　奎文　和田　豊二

小委員決定

去る十一月廿九日昭和十七年度校友總會の決議に基づき母校關西大學の發展擴充策調査研究の委員人選は詮衡委員に於て決定し、一月二十八日付左の通り決定した。近く第一回委員會開催されるが今後の動向が注目される。

芦　傳一　岩崎　卯一　生島　藤藏
宇佐美正祐　植田　完治　江里口春志
河村　宜介　里見　復二　角田好太郎
高梨　乙松　浪江　源治　西島系三郎
春原源太郎　廣田　寛信　樋口哲四郎
堀畑　旰一　松本茂三郎　前田　常好
三好　萬次　三島　律夫　森川　太郎
和田　豊二

千里山學士會

昭和十七年十二月十五日千里山學士會は日本橋イシドウに於て總會を開催、新陣容を整へ活動を開始した學士會は會員間に力强い結集を促し出席會員百十三名場に溢るゝ盛會であつた。午後六時樫本信雄君司會の下に國民儀禮の後開會、會長神戸學長、理事長角田好太郎君の挨拶庶務係より事業並會計報告あり歡談夕食の後大阪新聞主筆鹽澤元次氏の對外情勢に關する二時間に亘る憂國の熱辯に耳を傾け會員より献金の議あり大阪新聞に寄託して國防献金をすることゝした。

本年度學士會として特筆すべきことは改正會則に基き理事長の外に副理事長山崎敬義君、樫本信雄君、庶務會計の擔當者を定め理事會を數回開催して意見を交しその間學士會側と本學理事者との懇談會を開き種々建設的意見の交換を爲し又學部長との懇談會に於ては本學の文化建設に關する意見を交し今後もこの種の努力を續ける豫定にある。會員諸君からの御意見は學報局氣付學士會庶務宛に御通報を切望する。（庶務係報）

愛知支部總會

曾つては東海支部として屢々會合してゐた處、支部長初め役員の轉出により、數年間休止の狀態にあつたが、在住校友百名を超へ中京支部確立の要望の壁高くこゝに愛知支部として發足することゝなり舊臘十九日（土）午後五時より名古屋市廣小路「花月」に於て總會を開催した。當日は防空演習と競合の爲め欠席已むなき會員もあつたが、母校より學長神戸博士臨席せられ、一段と生彩を加ふ。定刻松廣毒衛君司會にて國民儀禮の後、會則を審議決定し、支部長に宗本利市氏を推し、副支部長、幹事長、幹事もそれ〴〵決定、宗本支部長の就任の挨拶について、神戸學長は母校の現況を詳細に報告すると共に校友會本部の近狀を述べ活潑なる支部活動を熱望して結び、場は和やかに賑やかに、在學時代の今昔を語りて八時半母校並に支部の萬歲を三唱して閉會した。

當日決定の役員は次の通りである。

支部長　宗本利市
副支部長　松本駒吉、中根孫市
幹事長　松廣毒衛
幹事　石谷茂、安藤富吉、森健、千住正男、近藤孝、黑田永次、楠崎優
支部事務所　名古屋市東外堀町二ノ四　宗本利市方

秀麗會（關東州支部）

第八〇回例會、十二月十九日午後六時より若狹町きぬ川に開催、集ふ者高濱支部長初め十六名、室山さん初め古參連中は殆ど顔が揃つたが、例年出席率横綱格の平井さんが折悪しく缺席、當夜はきぬ川の經營主前川さんが愈々時局の曙光を浴びて軍需産業方面へ轉向の發表あり、前川さん最後の御奉仕に預つて滿悦の裡に九時四十分學歌齊唱散會す。

出席者―高濱直一、室山宇太郎、秀島金治、川野勳平、守谷賢治、高木嘉一郎、池内輝一、山下三郎、前川嘉一郎、黑田健勝、萩原博、加來茂彦、永田淺雄、貴村一雄、荒川彌二郎、小川立朝

上海支部

昭和十七年最終の例會を十二月四日、日本倶樂部に開催、集る者十三名、南方より歸滬された中華航空の砂野隆君のビルマ、マライ、ジャバ等の民俗譚や浙贛線より來滬の鹽見君の現地報告あり、大森幹事長より藤木順章氏が大東亞戰爭勃發一周年を記念して本會支部の爲め儀備券五千圓の多額の寄附ありたる旨發表あり、一同深甚の謝意を表す。尙例會は次回より「物を聽く會」として會員交互に自己の職域範圍の蘊蓄を傾けることとし廿一時過に東方母校を偲び萬歲を三唱して閉會した。

出席者―忽那、辻野、吉田、高木、楓塚、鹽見、砂野、大戸、細川、谷口、手島、佐藤、大森

學部昭六會

秋期親睦會は、偶々會員内務事務官久井忠雄、廣島縣立第一工業學校教諭秋田岩藏兩君の來阪を機に、兩君の歡迎を兼ねて十二月九日午後五時半より戎橋北入半田に於て開催した。

學窓を出でゝ十一年、卒業後初めて顏を合する會員もありて「十年一昔」とは良く言へるもの哉の感なき能はざるも學生時代と少しも變らざる思のするは何たる不思議ぞとの感想を漏し居りたり。宮田君の開會亜に歡迎の辭に始まり次で開宴、宴半にして、八島君の學校の現況報告、青野君の國民會館に於ける評議員會の模樣の報告あり、數君より、他の新興學園に於て、次々に自然科學の學部學科の設置を見又見むとし、國家の之が設置の要請急ならむとするとき、六十年に垂んとする歴史を有する吾學園に之が設置、の氣運さへ見へざるは甚だ遺憾とする旨の意見開陳あり、會する者異口同音に速に自然科學々部設置の氣運醸成に努めざる可からずとの意見を吐露せられたり。

斯くて十分歡を盡して、學歌亜に學生歌を高唱、母校の萬歳を三唱して散會したり。

因に當日決定したる役員亜出席者左の如し。

會長　堀畑吁一、幹事長　青野昌平

久井忠雄、秋田岩藏、糸山菊雄、羽生忠、八島治一、西山良一、堀畑吁一、岡部俊吾、尾崎年雄、金子辰雄、鎌田義英、高橋長三、大和恒一、福原菊治郎、後藤幸重、寺田伴嗣、朝倉茂直、有賀次郎、青野昌平、佐野綱、喜田由造、木村儀三郎、宮田八束、三谷久男、廣田利一

睦法會總會及例會

昭和八年千里山法律學會の卒業生（同會特別會員）を以て、結成してゐた關西大學千里山法學クラブは、法律學會が學部報國團の中に法律學研究班として包攝せられた關係上、勢ひ一應形式的にもその會則を改めざるを得ざることゝなり、之を機會にその内容の充實發展をも期して、去る七月七日野村クラブに於いて總會を開き、「睦法會」と改めた。しかし睦法會と法律學研究班とは右のごとく舊關西大學千里山法律學會の發展分化したものであつて、兩者の精神的な結ばれ方は全く從來通りではゞ異體同心的なので十一月六日の夕北濱の新東洋において兩者合同の總集會が催され、今回南方に雄飛せられることになつた中村毅君（神戸海務局勤務）と、北支及南方に轉戰すること三年、目出度歸還除隊となつた會員小鹿孝之進君の歡迎をもかねて、昭和十八年度法律學研究班新入會員の歡迎會が開かれた。會する者三十有餘名、殊に遠々來會された京城地方法院の吳健一君もあり、恩師會長中谷先生を圍んで、和氣藹々裡に歡迎の賀を擧ぐると共に、睦法會及法律學研究班は今後一段とその職分を通じて學園のため邦家のため奉公の誠を竭さんものと誓ひ合つた。因みに本會事業は集會・會報發行・研究班援助・その他、會長には中谷敬壽先生・名譽會員には舊千里山法律學會顧問の諸先生・顧問には前學長仁保龜松先生をそれ〴〵推戴してゐる。（南出君報）

會員消息

赤野　正男（昭7大法）（守口警察署）
池田　忠雄（昭13大法）（大阪府警察部經濟保安課）
泉本　正隆（昭10大法）（府警察部刑事課）
大隅　宋廣（大12專法）（日本無線工業會社常任監査役）
大津　一（大10專經）（陸軍屬、廣島陸軍被服廠）
大西　品吉（大10專法）（大阪市清掃國民學校長）
金子金次郎（大8專法）（大阪市住吉區長）
木下　一男（大9專法）（大阪市西淀川區長）
北村清太郎（大14專法）岡山市西中山下（營林署技師、岡山營林署長）
小林　昶（昭6專法）（大阪市會議員、辯護士）
酒井　尊雄（昭8專二法）（奉天市敷島區協和街五段七號大阪毎日滿洲販賣總局）
杉本幸次郎（大11專法）（三重縣神邊國民學校長）
田中　巧（昭9大法）（地方事務官、大阪府經濟部）
高田　密藏（大12專法）（大阪市旭區長）
圖師　親德（昭7大法）東區本町四ノ五八（辯護士、電話船場三九）
難波江正明（昭7大法）（大阪府屬、警察部勞政課）
橋本　利八（大14專法）比島軍政監部中部呂宋支部（陸軍司政官）
室山宇太郎（大4專商）（關東州機帆船運航會社業務部長）

訃音

仁禮　景賀（昭5專法 昭8大法）校友會評議員、十二月廿九日急逝。
工藤　義正（昭3專法）前校友會評議員去る一月廿二日逝去。
増子　一己（大313專經 昭313大經）校友會評議員、一月廿六日急性肺炎にて急逝。
阿部　正一（大1513專經）校友會評議員、去る一月廿五日逝去。
漆間　達禪（昭16大法）大東亞戰の花と散られ二月六日天王寺區勝山通、齋法寺に公葬が執行された。
紙谷　久善（昭15專國）中支作戰中昨年八月廿五日壯烈な戰死を遂げられ去る一月廿日公葬が行はれた。遺族住吉區平野三十歩二ノ九、父紙谷久松殿。
清水　忠男（昭15專二商）中支方面に奮戰中昨年十二月十日散華せられた。遺族飾磨市職業指導所内（弟）高男殿

千里山圖書館購入南方關係書

辭書・年表

青山定雄著　讀史方輿紀要索引　支那歷代地名要覽　昭和14　東方文化學院
小島昌太郎著　支那最近大事年表　昭和17　有斐閣
小林幾治郎著　支那經濟商業辭典　昭和17　大阪屋號
中央公論社編　支那問題辭典　昭和17　同社
東亞研究所論　ビルマ地名要覽　昭和17　同所
南洋經濟研究所編　大南洋地名辭典　昭和17　丸善
第3卷　馬來及北西ボルネオ　昭和17

雜誌・年鑑類

雲南省政府秘書處統計室編　雲南省政府統計簡報　民國23年度　民國23　同處
外務省調査部編　回教事情　自第1卷至第4卷　昭和13-16　改造社
京都帝國大學人文科學研究所編　東亞人文學報　第1卷第2號　昭和16　弘文堂
東亞研究所編　東亞統計叢書　同所
II　南方統計要覽　上卷　昭和17
東亞貿易政策研究會編　大東亞共榮圈綜合貿易年表　有斐閣
I　泰國　昭和17
III　中華民國總覽　昭和17
IV　比律賓　昭和17
法貴三郎・鈴木修二・神宮司瑞郎　共編　比律賓統計書　昭和17　國際日本協會

地理・歷史

飯本信之・佐藤弘　共編　南洋地理大系　ダイヤモンド社
第1卷　南洋總論　昭和17
第2卷　海南島・フイリッピン・內南洋　昭和17
第3卷　タイ・佛印　昭和17
第6卷　東印度II　昭和17
伊能嘉矩著　臺灣文化志　上・中・下　昭和3　刀江書院
石山賢吉著　紀行滿洲・臺灣・海南島　昭和17　ダイヤモンド社
尾高鮮之助著　印度日記　昭和14　刀江書院
江日昇編　臺灣外記・賜國姓鄭成功全傳　求無不獲齋
第1卷　江夏侯驚夢保山　外
第2卷　登煤山明祚攸終　外
第3卷　肇慶府桂王僭位　外
第4卷　國軒合謀歸鄭藩　外
第5卷　何斌獻策取臺灣　外
第6卷　周金斌金門大戰　外
第7卷　援南邦之信遇敵　外
第8卷　劉國軒大鬧江東　外
第9卷　錫范爲堵祖克壓　外
第10卷　江勝邱煌雙盡節　外
小林織之助著　南太平洋諸島　昭和17　統正社
臺灣總督府官房調査課編　英領馬來事情　南支那及南洋調査・第139輯　昭和2　同課
臺灣總督府熱帶產業調査會編　福州攷　熱帶產業調査會叢書・第6號　昭和12　同會
拓務省拓務局編　濠洲委任統治領ニューギニア事情　昭和13　同局
同　編　セレベス島事情　昭和7　同上
海外拓殖事業調査資料　第18輯
同　編　關領ニューギニア事情　昭和11　同上
同　上　第31輯
同　編　サラワツク王國事情　昭和13　同上
同　上　第57輯
南洋協會臺灣支部編　關領ボルネオ　南洋叢書第34卷　大正13　同支部
同　編　關領ニウギニア及モルツカス諸島
同　上　第35卷　大正13　同上
南洋廳長官官房調査課編　英直轄殖民地ギルバート及エリス諸島概況　昭和16　同課
南洋廳內務部企畫課編　英保護領トンガ諸島事情　昭和16　同課
南洋廳企畫課資料・第12輯
西村朝太郎著　馬來編年史研究（スヂヤラ・マラユ）　昭和17　東亞研究所
東研叢書4
法貴三郎譯　フイリツピン史（Barrow P. D著）　昭和17　生活社
山本晉道著　天竺紀行　昭和16　是眞會
陽湖汪洵署編　東南海島圖經　自卷1至卷4及附圖　同署

經濟・產業・交通・通信

飯尾禎著　大東亞共榮圈交通綜覽　昭和17　東洋堂
岡崎次郎譯　世界鑛業論（Friedensburg F. 著）　昭和17　生活社
綰方正編　南方圈の經濟的價値　昭和16　臺灣南洋協會臺灣支部
外務省調査部編　十七世紀に於ける日蘭關係　昭和9　同部
蒲原廣二著　ダバオ邦人開拓史　昭和13　日比新聞社
岸本綺三著　油槽船の經營と連船　昭和17　共榮書房
北澤新次郎・宇井丑之助　共著　石油經濟論　昭和16　千倉書房
金陵大學農學院農業經濟系編　河南・湖北・安徽・江西四省土地分類研究・中
支那經濟資料19　昭和16　生活社
小島精一著　東亞經濟論　昭和16　千倉書房
交通大學研究所社會經濟班編　小麥及び麵粉・支那經濟資料9　昭和15　生活社
佐藤昌介・稻田昌植　共著　世界農業史論　昭和16　目黑書店
杉本壽著　支那林業經濟建設論　昭和17　京都教育圖書會社
臺灣銀行總務部調査局編　南洋調査報告書　大正5　同局
同　編　廣東・廣西兩省出張報告概要　大正8　同上
臺灣總督府財務局編　南支・南洋の金融　昭和10　同局
臺灣總督府殖產局商工課編　南支・南洋の工業　昭和10　同課
拓務省拓務局編　比島「ミンダナオ」州產業調査報告書　昭和6　同局
海外拓殖事業調査資料・第8輯
玉井是博著　支那社會經濟史研究　昭和17　岩波書店
檜崎敏雄著　東亞交通政策要論　昭和16　ダイヤモンド社
日蘇通信社編　大東亞經濟資源大觀　昭和17　同社
日本學術振興會編　支那の通貨と貿易　昭和17　有斐閣
根島勉治著　南方農業問題　昭和17　日本評論社
福田要著　南支那の資源と其の經營的價値　昭和14　千倉書房
平漢鐵路管理局經濟調査班編　重慶經濟調査・下卷　昭和15　生活社
支那經濟資料・2
逸見重雄著　佛領印度支那研究　昭和17　日本評論社
法貴三郎譯　フイリツピン史（Barrows P. L. 著）　昭和17　生活社
本位田祥男著　大東亞經濟建設　昭和17　日本評論社